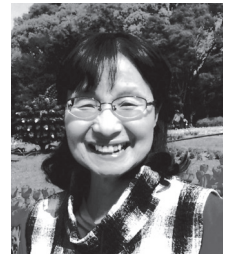


●特集● 学校教育における実践知を問う

今、なぜ生活綴方教育か
—子どもの声を聴く

コロナウイルス禍で、かつてない困難な状況が教育現場に広がっている。その中で、「教育とは何か」「子ども理解とは何か」ひいては「学校の値うちとは何か」という原点に返った問い直しが求められている。そんな今、教育遺産にしたいと言われていた「生活綴方教育」に今日の教育の困難を拓く鍵があるのではないかと改めて光が当てられている。その論拠を実践を通して明らかにしたい。



土佐いく子

はじめに

一斉休校明け、子どもたちの元気な声が学校に戻ってきた。その賑やかな声の中で、ランドセルを放り出して暴れる3年生の子に若い担任は頭を抱えていた。叱るのをやめて「どうしたの」と優しく声をかけたら「ずっと友だちと遊べなかったからいっぱい遊びたいのに先生勉強ばかりや」と言う。「そうか、ほんとやなあ、先生勉強遅れてるからって、勉強ばかり言うてたなあ、ごめん、ごめん。」子どもに笑顔が戻ってきた。子どもの声をていねいに聴きとり、不安や悲しみ小さな喜びに共感してくれる先生や友達の存在が今ほど求められている時はない。

ところが、この時とばかりに1人1台のネット端末を配布する「GIGA スクール構想」が始まり、現場は混乱している。

ある地域の教職員研究会に招かれて話をする機会があった。「子どもたちに表現の喜び

●とさ・いくこ●

1948年生まれ、広島大学教育学部卒、元小学校教諭、和歌山大学非常勤講師、専門：教育学、生活綴方教育。著書：『子どもたちに表現の喜びと生きる希望を』（日本機関紙出版センター、2005）、『マジョリン先生の学級づくりたねあかし』（フォーラムA、2013）他。

と生きる希望を—『子どもの声を聴く』』というテーマでの講演で、皆さんが言葉を吸い取るように真剣に聞いてくださった後、主催者の校長が挨拶に立った。立ち上がってもしばらく言葉が出ない。「ショックでした。この間、タブレットで機械の操作にばかり目がいって、子どもが見えていませんでした。ショックでした」と、「はじめに子どもありき」に戻る時だと改めて実感した¹⁾。

1 大学生も「先生聴いて」

大学で「教職論」の授業を担当している。「子ども理解」についての講義で、子どもの作文を読むと「そんな本当のこと今まで作文に書いたことありません。私も聴いて欲しくなりました」とその日の授業カードに自分を開示した文章が綿々と綴られていて驚いた。

「大学に入学して日数は経過するものの、未だに話せる友人は一人もいません。コロナウイルス禍でソーシャルディスタンスとマスクで、状況的に話しかけられず、唯一自分に反応してくれるスマホの音声検索機能さえ、意味不明な反応をして、不安で、不安で。」「部屋に一人、孤独感、何のために生きているのか、これから何のために生きていけばいいの

キーワード：生活綴り方 (Daily Life Writing)、子ども理解 (understanding child)、自治能力 (Ability of Self-governance)

かわかりません。ふとした時に、死にたいと思ってしまう。いったい本当の自分って何なのか。こんな今の自分を先生に聴いて欲しくて。」

こうした学生的心声を「大学通信」に掲載し、毎授業の始めに読んでいる。この2人は仮名なら掲載可だと言う。みんなに聴いてほしい、わかってほしいと思っているのだ。これを読んだ学生「私と同じ気持ちでいる人がいると思っただけで、ほっとしています。私は受験とコロナでストレスがたまって、生理の前にはうつになり、HSP（ハイリー・センシティブ・パーソン、人一倍繊細な気質をもつ人）の気分になり、人の気持ちや音や匂いに敏感で苦しいです。」「ぼくも父親がコロナで仕事なくなり、不倫、とうとう離婚、自分を支えていたものが崩れたような気持ちです。僕は奨学金がとれないと大学が続けられなくなるだろうと不安です。」ああ、なんと言う今だろうか。

しかし、彼らは「書いてちょっとすっとなりました」「この授業に来たらほっとして、教室の仲間みたいに感じます」と言う。

聴いてくれる安心があれば、彼らは自分の胸の内を自分の言葉にして表現する。いや表現したいのだ。そして、書くことで吐き出し楽になる。わかってくれる、同じ思いの人がいるという安心感が、彼らの顔を上げさせている。何のために生きているのかと一人問答してきた学生は、それ以後、ずいぶん文章を綴ってきた。そしてある時「先生、このごろ一人走っています。ちょっとずつ季節が移っていくのが見えて、この前は桜の葉の色が青々としていて、なんか気持ちよかったです。公園を走っている時、先生が通信に描いていた花が咲いていて名前がわかると面白いですね」と書いてくれた。

そうか部屋から抜け出して走っているのか、

季節の移り変わり、木々の変化にも目をとめ、公園の花も面白いと思えている。自分の世界が外に向かって広がり、五感をくぐった言葉が立ち上がってきているではないか。

こうして、大学生も書くことや、集団の中で読み合うことの意味を実感しており、生活綴方の出番の思いしきりである²⁾。

2 子どもの表現から何を読み取るのか

「子どもの声を聴く」と言うが、その声をどう受け止め、どう理解するかこそが問われている。生活綴方は、ここにも貴重な問題提起をし、実践を蓄えてきた。

授業を妨害し、まわりを扇動するという子を3年生で担任することになった。最初の国語の授業の時だった。教科書の扉の詩、まどみちおの「てつぼう」を読み始めた。「くるりと足かけ上がりをしたら」と読むと、間髪入れず立ち上がった勇太は、巻舌で「オイ！くるりんやて、みんな言え」と言うのと、何人かが「くるりん」と反応するには驚いた。

ここで教師は、甘い顔を見せると学級が崩壊するから「びしっと締めろ」と言われるだろう。私も動揺したが勇太は、にこにこ笑いながら言うのだ。ここで私は「おっ！なかなか実感もってるな！オレ鉄棒上手やでって聞こえたわ」と言うのと「なんで先生知ってるん？ほんまに勇太鉄棒うまいで」と言う。いきなり立ち上がって、「鉄棒見せてやる」と出て行こうとする。なだめて、授業が終わってすぐに一緒に運動場に出た。私の目の前で、落ちたら怪我しそうな技を得意げに見せてくれた。

この「くるりん」の対応を見て、「先生は、子どもをかわすのが得意ですね」と言う先生もいた。私は、かわしたのではない。「くるりん、みんな言え」というあの言動の中に、彼の「オレ鉄棒うまいんやで、なあみんな知っ

てるやろ」という声を聴いたからだ。

生活綴方教育は私に、子どもの見方を学ばせてくれた。1, 2年生の時、自ら鉛筆を握って文字を書いたことがないと言う勇太が、こんな作文を「書いたるか」と言って書いてくれた。

三年生になって 勇太

ぼくは、てつぼうで「いのちがけ」っていうわざができます。ほかには、「じごくまわり」「こうもりふりおり」「きんにくまわり」「まえまわりのれんぞく」「くうちゅうさかあがり」「ひこうとび」そのほかにも、もっとあります。

スポーツで、てつぼうやったらできます。いろいろいってください。やすみじかんは、てつぼうをしています。

まさしくんは、ときどきけんかをうってくるけど、やさしいです。だけど、ときどきわからしてくれませう。まさしくんは、ときどきこわいけど、ほんとうは、まさしくんは、やさしいです。まさしくんのおばちゃんは、クッキーがうまいです。まさしくんは、あたまがおいしい、せもたかいし、あたまはでかいし……。

手に汗し、鉛筆を握りしめ、まっ黒になるまで力を込めて黙々と書いてくれた。「あたまはでかいし」のところで、私が声をかけたものだから「ハイ、これで終わり」と鉛筆を置いたのだ。悪かったなあ。

しかし、この文章はどうだ。勇太のファンファーレではないか。8つも技が書いてある。一つ一つ上手になるのに練習を重ねてきた日々があっただろうな。「もっとあります」「やったらできます」「いろいろいってください」敬体で終わるこの文章表現にまっとうに生きたい、育ちたいと言う勇太の人間としての誇りが感じられるではないか。「先生、この前見せてあげた(技の)他にまだあるんや

で。ぼくね、スポーツやったらてつぼうこんなにできるから、また出番作ってね」と訴えている。ケンカ友だちで、憧れてもいるまさしのことを5回も名前を書いて、まさしみたいに背も大きくなりたいし、「頭はでかいし」、まさしみたいに賢くなりたいんだという精一杯の思いがひしひしと伝わってきていとおしい³⁾。文章を自ら書くという行為、それは、実に自由で主体的な行為である。真つ当な自分と向き合わずして、本当の言葉は生まれ出ない。書くことを通して自己発見や自己確認をしているのだ。

だからこそ、私たちは、子どもが書きたくて書いた文章は、文のおけいこをしているのではなく自己表現であり「生きている証」なのだ。と宝物を拾うように大切に受け止めてきた。

「くるとりみんな言え」の言葉に、そして「書いたるか」と自ら書いた文章を読んで、私は子どもを発見し、子ども理解を深め、背筋が伸びた思いをした。それが生活綴方教育であった。

3 生活綴方教育と自治能力の形成

子どもの作文を読んで、赤ペンで返事を書いて棚に積んでいたのでは、その作文は生きて働きはしない。毎日発行していた学級通信に勇太の作文を載せ、読み合い語り合っこそ集団の中で機能していくのだ。

授業の妨害をし、ケンカしては毎日叱られていた勇太の中に、ぼくも出番が欲しい賢くなりたいという真つ当な願いを知ったことで、学級の仲間の勇太への見方が少しずつ変わっていくのに驚いた。勇太自身の言動に変化が生まれてきたからだろう。体育係として、「鉄棒発明会」でリーダー的な役割を果たして、一目も二目も置かれた。終わりの会の「提案の時間」には、地域の朝鮮学校の人としたドッ

ヂボールのやり方が面白かったから、みんなでやらないかと提案もした。あまり楽しかったので、日曜参観で保護者の方とやろうという提案も出し、みごとにやってのけた。子どもたちやるじゃないですか。

掛け算の九九は未習得、漢字テストの正解は1, 2問、宿題は毎日みごとにやってこないまあちゃんが、こんな日記を書いてきた。

前の日よう日、夜の10時ぐらいになったら赤ちゃん(8カ月の弟)がなくてこまった。それで、ミルクの作りかたがわからなかったから、だっこをして、1時間かかってやっとねた。

けど、つかれてふとんに入ったら、また泣きそうになってトントンしてやった。しんどかったです。

夜の10時になっても仕事から帰らぬ両親を待ちながら、3年生の子が、8カ月の弟の面倒をみている暮らしがここにある。

実は、私もこの日記を読んで初めてこの暮らしの事実を知った。書いてくれたればこそだ。宿題は、全くしないのに「先生しんどかったよ」と伝えたくて、日記を書いたのだ。子どもは暮らしをランドセルに背負って学校へやって来る。この暮らしを知らずして、教育は成り立たないと綴方教育は教えてくれた。

私は、この日記を通信に掲載した。(もちろん事前に本人はもちろん、保護者にも許可をとる。)それは、かわいそうなまあちゃんの暮らしに同情を寄せるためではない。厳しい暮らしの中で、顔を上げ、踏んばって生きている健気な姿を読み合いたかったのだ。本当の暮らしを真実の言葉で綴った文章は、クラスの仲間の心を動かさずにはいない。

子どもたちは、どうしたらまあちゃんが宿題を習得できるのかを、自分たちで知恵を出し工夫して取り組む。こうした姿を通して子らの能動性、自らを育てる力に感動し、たの

もしさを感じた。

子どもたちの自主活動の一つであった学級クラブ活動に「カジノクラブ」ができた。牛乳のふたをベッタン(関東では「めんこ」と呼ばれる。カードを相手のカードにたたきつけて裏返ったらそのカードがもらえる遊び)にして、取り合うのだ。まあちゃんが、ある日、どっさり集めたベッタンをフェルトの布で縫った袋に入れてきた。自分で縫ったと言う。これには、わけがある。制服の前のボタンがケンカして3つとも取れたので、1つだけ私がつけてやり、あとの2つは「お母さんの手でつけてやって」と針と糸を渡したのだ。

その袋がかっこいいと、その日のうちに「ぬいものクラブ」が結成された。針を使うので、目が離せない。何人かの保護者の協力も得て、袋はもちろん、人形のスカートなどを作ったりもして楽しんだ。

さらに、子どもたちは「先生、宿題って家でやるやろ、ぼくも一緒に宿題とかするけど、(まあちゃんの)おぼちゃんにもがんばってと言いに行つてよ」と背中を押され、家庭訪問に行く。お母さんと遅い時間に会って、いろいろ話し込んだ。「なあ、先生うちな、勉強もわからんし、先生にも嫌われとって、高校中退や。シンナー吸うとって、タバコの火がついて爆発して、救急車で運ばれたんや。これその時の火傷の跡やし」と袖をめくって傷を見せてくれた。「まあ、うちもこんな親やし、あの子もあんなんやろ。なあ先生、うちらのこと見捨てへん?!」ちょっとドギマギしたが、「お母さん、他人に言いにくい話をようしてくれたね。生き直そうと思ってるからやな、一緒にがんばっていこう」と言うと、笑顔が返ってきた。

これも、お母さんの生活綴方だ。本当のことをありのまま語ってくれた真実の言葉は、私を動かさないではいなかった。取れたボタ

ンをお母さんの手でつけてあげると、針と糸を渡したのも生き直すことの一つだったと励ました。「先生、みてみて、母ちゃんがこのボタンつけてくれたんやで」と朝一番に見せに来てくれたまあちゃんの顔は忘れられない。

7×6=42 がなかなか覚えられないまあちゃんに、算数係の子らは、7×6のカードを教室の入口にぶら下げ、教室の出入りの度に「しちろくしじゅうに」と「開けゴマ」みたいに言わせる工夫もした、大したもんだ。見事に九九を習得した時、本人はもちろん、学級集団の力ってすごいんだと身体で学んだ子どもたちであった⁴⁾。こうした活動が可能になったのは、まさにそこに生活綴方教育のいとなみがあったからである。聴いてくれる先生や、仲間がいる中、ありのままの自分が表現できる安心感、集団への信頼がある。これがなくて、自治能力は育ち得ない。作文を読み合う活動を通し、自己と他者を理解し、人格と人格が結び合っていく中から自治能力は形成されていく。

4 生活綴方教育は、子どもの意見表明を保障する

巻舌で「くるりん」と言って、みんなを煽動したのも意見表明であり、テストを丸めて投げ捨てながら「ぼくもこのテスト100点取りたいわ」と言うのも意見表明なのだ。「先生、弟泣いて困った。しんどかったよ。」という日記も子どもの意見表明だ。

「死ね死ね」と黄色い帽子に書き「オレなんか生まれてこんかったらよかったんや」と吐き捨てるように言う子の「死ね」も意見表明なのだ。「ひいきすな」と叫んで、学級を崩壊させた子の叫びも「先生、私のことも大事にしてよ」という意見表明だ。

困った子の腹立たしい言動の中に、子どもの本当の声を聴く。生活綴方教育が子ども理

解を学ばせてくれることは、今日とりわけ大きな意味がある。

国連子どもの権利委員会、ジェネラルコメント第7号にある意見とは「opinion」ではなく「view」なのだ。非言語的なコミュニケーション、あらゆる言動、身ぶり、表情、つぶやき、落書きした絵からも、子どもの意見を聴き取することを教えてくれている。教室での「書く」といういとなみが、日常的に保障されていることの「ねうち」を思う。思ったこと、感じたこと、困っていること聴いてほしいことを書いてみんなに聴いてもらえる安心感が、子どもの生存の土台を支えている。

綴方サークルの仲間の学級で、こんな作文が生まれた。1年生の子だ。

いつも、おべんとうのとき、せんせいはみんなに手をあらわなあかんといっている。だけど、せんせいは手をあらっていません。あきはいつも、それをみています。

だけど、みんなはぜんぜん気がついていません。ああいうせんせいは、なまけものとおもいます。みんなは、どうおもう、ああいうせんせい。

あつばれでしょ！これが言える、これが書ける安心の教室、子どもたちと先生との関係が素晴らしい。生活綴方教育は、子どもの意見表明をしっかりと保障する取り組みなのだ。

おわりに

大阪市立木川南小学校の久保校長は、やむにやまれず、今日の大阪市の教育について、市長に掲言を送った。「学校は、グローバル経済を支える人材という『商品』を作り出す工場と化している。そこでは、子どもたちは、テストの点数によって選別される『競争』にさらされる。そして、教職員は、子どもの成長にかかわる教育の本質に根差した働きがで

きず、何のためかわからないような仕事に追われ、使命感や意欲さえ失いつつある。」⁵⁾ その通りであり、改めて「学校とは何か」「教育とは何か」が突きつけられている。

しかし、私は、コロナウイルス禍で、「学校があつてよかった」としみじみ思う取り組みにたくさん出会い、学校も教育も捨てたもんじじゃないとの思いを強くしている。あの一斉休校中、先生方が一人ひとりの家を訪問し、子どもや保護者の声を聴き、日記を書いてもらい、それを通信や一枚文集にして配布した学校ぐるみの取り組みがあつた。学校あげて作文教育に取り組んでいる学校だ⁶⁾。

学校ぐるみとまではいかないが、子どもたちが「学校行事みんななくなって面白くないから学級行事にしよう」と提案、計画しやつてのけた実践が生まれている。子どもたちの力を再発見し、教師が励まされている。

ある地域で、学校と地域を結んだダイナミックなまさに自治能力が形成されている実践が生まれている。これが本誌 2022 年 1 月号の「新型コロナ“対話の授業”で学校に発達環境を取り戻す」として紹介されている⁷⁾。子どもたちの運動会がしたいという要求、能動性が学校や地域を動かし、教育コミュニティへと発展した実践は圧巻であつた。これも「子どもの声を聴くことを重視し、子どもが自分の不安や願いを言葉にした表現に（表出）することを大事にし、「対話の授業」として発展させる中で可能になった実践だ。

2022 年 8 月 6 日から 3 日間大阪で開催される「全国作文教育研究会」の取り組みが、若い仲間たち中心に精力的に進められている。「もう落ち着かないし、子どもが可愛いつて思えない自分がいて、なんかもう落ち込みます。」そんな若者が、綴方教育と出会い元気になっている。

この忙しいのに作文なんかやる時間ないと

言っていた先生たちは、ああ書け、こう書くなという制約を外し、本当に書きたいことを自由にのびのびと子どもに書いてもらったら、喜んで書くことに驚いたと言う。読んでみると、「この子いなかったらラクやのに」と思っていた子が、こんな可愛いことをしているのかと、気持ちが穏やかになれたと言う。しかも、そんな作文を教室で読んであげたらいつも騒がしい子らが静かに聴いてくれるからこれまたびっくり。一枚文集にして配ったら、保護者から「先生、子どもらの作文面白いですね。先生も大変だと思いますが、また読ませてくださいね」という声が届き「やる気出ます」と笑顔で語っている。全国大会の取り組みの中で、こんな輪が広がっていて頼もしい。

生活綴方教育は、全教育活動の土台であり屋台骨である。現在の「学力観」や「学習のあり方」を組み替える力になり、他者とのコミュニケーション能力を形成し、自己理解、他者理解を深め、自己への肯定感、人間への信頼を深くし、人を人にしていく教育そのもののいとなみである。

「はじめに子どもありき」

「子どもの心の声を聴く」

コロナウイルス禍は、このことの大きな意味を我々の胸に落とし込んでくれた。全国大会を機に、生活綴方教育の輪が大きく広がっていくことを期待している。

参考文献

- 1) 佐古田好一：『はじめに子どもありき 教育のこころと仕事についての断想』（部落問題研究所，1984）。
- 2) 太田 堯，山本昌知：『ひとなる』（藤原書房，2016）。
- 3) 土佐いく子：『子どもたちに表現の喜びと生きる希望を』（日本機関紙出版センター，2005）。
- 4) 土佐いく子：『マジョリン先生の学級づくりたねあかし』（フォーラム・A，2013）。
- 5) 大阪市立木川南小学校 久保校長の「提言」全文：『朝日新聞デジタル』2021 年 5 月 17 日 (<https://www.asahi.com>)。
- 6) 勝村謙司：『続・心の作文』（かもがわ出版，2021）。
- 7) 白川俊義：「新型コロナ“対話の授業”で学校に発達環境を取り戻す」『日本の科学者』57（1），23-28（2022）。